



### 〈2012年春の号の内容〉

- 1 会長復帰の挨拶、副会長の挨拶 (小畑・立花)
- 2 2011年11月～2012年3月の出来事
- 3 講演会／寄稿文1 (安田)
- 4 寄稿文2 (山出)／コラム (加納)

## 会長から復帰の挨拶

まず、去る2月24日の理事会で、私の会長職復帰が認められたことをご報告します。

2011年後半、会長代行を務めてくださった立花副会長をはじめ、AJEQの活動を担ってくださった理事の方々に、ここに改めて感謝の意を表します。会員の方々も学会活動を盛り上げてくださり、感謝に堪えません。

特に、昨秋の大会はUNIFAとの共催で大成功を取め、日本ケベック学会の存在を内外に示すことができた嬉しく思っております。会長がいなくても組織が動くことはよいことで、それだけこの学会も根をおろしてきたということでしょう。もちろんまだ問題も多々あり、そうした点が不在の間に洗い出されてきたことも私にとっては不幸中の幸いです。世の中悪いこともあれば、よいこともあるものです。

思えば、昨夏に下咽頭癌のため入退院を繰り返して治療、その効果があつてなんとか復帰できたのも、楽天的に考えてきたことが一因のように感じられます。ポツクリ逝くのもいいけれど、癌は様々なことを患者に考えさせる「よい病気」だという医者もいるくらいです。皆さま、ご心配をかけましたが、今後もよろしくお願ひ申し上げます。私は元気です！（小畑精和）

## 副会長の挨拶—2011年から12年へ

根底から日本を揺るがすような出来事に見舞われた2011年明け、2012年も春を迎えました。大震災とは言え、AJEQにとっては、UNIFA参加があり、ダニー・ラフェリエール来日があり、去年は充実した一年でした。しかし、私は2という数字が昔から好きなので、2012年が、奇数の2011年よりいい年になってほしいと個人的に願っています。

さて、今年ようやく懸案のピエール・ブルデュー『国家貴族』（藤原書店刊）の翻訳が完成し、出版できました。本書は、直接的にはケベックと関係ないのですが、ブルデュー社会学の到達点であり、そこに読み取れる壮大な一般社会理論は、ケベック研究においても有効な武器になるはずで、学校制度の分析から国家論への思いがけぬ展開があり、ケベックのような植民地から出発した社会を考える上でも示唆に富んでいます。最後に、もう一言。白水社月刊誌『フランス』4月号から、フランス語圏の国々の大使館を訪問、大使などにインタビューする連載を始めます。来年1月号—3月号ではシャロン・ケベック州政府代表が登場します。そのインタビューを採録したCDがこの春の4月号に添付されています。聴いていただけると幸いです。（立花英裕）

## 2011年11月～12年3月までのAJEQの活動

2011年度全国大会（10月2日）終了後、AJEQは再び旺盛な活動を始めました。まず、小畑会長の監修のもとで9月20日から1月17日まで毎週続いた恒例の明治大学リレー講座「現代のケベック」は、今年からAJEQのブログにその毎回の詳細が報告されることになりました。10月には立花副会長および小倉副会長によるダニー・ラフェリエールの初邦訳刊行、11月には伊達会員の著作が誉れ高いサントリー学芸賞を受賞したことなどが大きな話題となりました。11月と2月にはガブリエル・ロワ、および現代女性文学についての研究会・勉強会がもたれました。12月には、瀬藤会員の司会によるジャン・ルイ・ロワ氏の講演会、小畑会長が開催する「現代ケベック講座」でのクロード・イヴ・シャロン氏による講演など、国際外交の世界のベテランの話を伺う機会がありました。1月には、飯笹会員の率先で青山学院大学国際交流共同研究センターに招かれた著述家フィル・ウッド氏によるクリエイティブな国際文化論の講演が、AJEQ会員の意識を高めました。

## 明治大学、2011年秋冬の「現代のケベック」講座

2011年度の講義内容と講師の先生方は次の通りでした（敬称略）。9月20日「ケベック概観—ケベックのおもしろさ」（小畑精和）・9月27日「独特な社会と言語政策」（矢頭典枝）・10月4日「伝統と近代化—ドキュメント映画を通して」（加納由起子）・10月11日「ケベックの教育と宗教」（伊達聖伸）・10月18日「フランコフォニーを力強く支えるケベック」（谷口侑）・10月25日「ケベックとフランコフォニー」（長谷川秀樹）・11月8日「ケベックのフランス語」（小松祐子）・11月15日「Gilles Vigneaultらの歌を通してみるケベック」（小畑精和）・11月22日「ケベック概況—外交官の視点から」（西岡淳）・11月29日「ケベックの産業経済」（池内光久）・12月6日「PLAN NORD 北部開発プロジェクト」（クロード・イヴ・シャロン）・12月13日「外交官の目から見たカナダとケベック」（沼田貞昭）・12月20日「ケベックの女性」（山出裕子）・1月17日「ケベックから日本が学ぶもの」（宮尾尊弘）。このうちのいくつかの講義については、ブログの「資料集」に詳しい解説があります

<http://ajeq.blog26.fc2.com/blog-entry-68.html>

## 勉強会と研究会

2011年11月26日、早稲田大学において、小倉副会長の司会により、ガブリエル・ロワ原作の1983年の映画 *Bonheur d'occasion* の上映を含む勉強会がもたれました。2012年2月24日には、明治大学駿河台校舎で、山出会員の司会のもと、矢内琴江さんによるケベック・フェミニズムの歴史についての研究発表「ケベックのフェミニスト活動家たちの歌」を中心とした研究会がもたれました。4月には、小倉副会長の司会のもと、ケベックから講師を招いたセミナーがもたれる予定です。立教大学池袋キャンパスで、4月23日と28日に、それぞれ「ケベックの詩—その始まりから現在まで」、「ケベック文学の現在」と題して行われます。詳細についてはブログをご覧ください。 <http://ajeq.blog26.fc2.com/blog-entry-71.html>

## 出版、書評、受賞

9月21日、藤原書店よりダニー・ラフェリエールの初邦訳『帰還の謎』（小倉和子訳）と『ハイチ震災日記—わたしのまわりのすべてが揺れる』（立花英裕訳）が刊行されました。中日新聞（10月16日）、読売新聞（11月14日）、朝日新聞および、毎日新聞（11月20日）などに、作者と翻訳者の豊かな詩的言語を褒める書評が出ました。また、藤原書店の季刊雑誌『環』2012年冬号（48巻）には、立花副会長によるラフェリエール論と氏のインタビューが掲載されています。他方、11月11日付のニュースで、第33回サントリー学芸賞および、第28回渋沢・クローデル賞ルイ・ヴィトン・ジャパン特別賞が、伊達会員の『ライシテ、道徳、宗教学—もうひとつの19世紀フランス宗教史』（勁草書房）に与えられることとなりました。伊達会員の画期的なライシテ研究の礎石となった記念的作品が認められたことは、AJEQ全会員にとっても大きな意味を持つ出来事と言えます。

## 2011年～12年冬の特別講演会

12月2日には、明治大学大学院特別講義として、瀬藤澄彦会員のイニシアチブにより、フランコフォニー国際機関事務総長のジャン・ルイ・ロワ氏を講師として招き、「グローバル化世界におけるフランコフォニーの挑戦」と題した講演会がもたれました。グローバリゼーションの中でフランコフォニー国際機関が果たす役割と今後の世界の展望を関連させた、興味深い講演でした。12月6日には、明治大学「現代のケベック」講座の一環として、ケベック州政府在日事務所代表のクロード・イヴ・シャロン氏による「PLAN NORD 北部開発プロジェクト」と題した講演がありました。今

後25年にわたって計画されているケベック州北部開発の展望について、初めて日本の学生が学ぶことのできる機会でした。「現代のケベック」講座でも、ケベックのインターカルチュラリズムの本質は大きな主題でしたが、1月20日には、その専門家を招いて、青山学院大学国際交流共同研究センターで講演会がもたれました。飯笹会員が司会をつとめた講演会は「インターカルチュラル・シティー文化の多様性を活かす都市政策の実践」と題され、同概念の提唱者として名高いフィル・ウッド氏が、英・仏・北欧・日本などの国を比較しながら平易にその理念を解き明かしてくれました。

### 会員からの寄稿文

#### 国際舞台芸術ミーティング (TPAM) 、ソウルから横浜へ、そして神戸へー ケベックと日本の舞台芸術交流の最前線

2011年10月の韓国ソウルの舞台見本市の様子をお伝えします。ここでもケベックのブースは昨年日本・横浜でのブースと同じくらいの大きさでした。今年の横浜での見本市はすでにレポートしたように、少しさびしくなった感じがします。ちなみに、現在の日本の文化予算は、韓国の半分だそうです。フランスの10分の1くらいでしょうか。2年後にユネスコの世界舞踊会議（ダンスカフェ協力予定）が千葉にて開催予定ですが、其の時までには日本の景気も回復して、文化予算も増えていることを期待したいと思います。また今年のモントリオールで、5/26（日）～6/9（日）に国際的なダンスと演劇の祭典、通称FTA（Festival TransAmeriques）が開催されます。プログラムの詳細は近く発表されるようです。そして秋には北米では最大の舞台見本市＜CINARS＞が11月12～18日まで開催されます。40カ国、1,000人の舞台関係者が集い地元はもちろん、海外の舞台作品等が売り買いされビジネスチャンスに、多くのアーティストたちが参加、舞台作品が見ることもできます。鑑賞においては専門家だけでなく一般参加も有料で見ることができます。1

月から6ヶ月滞在、ケベック州政府のアーティスト支援の一環として、東京でアーティストレジデンスの制度が3.4年前に設立、これまで画家、デザイナー達が来日しています。今年は昨年の3.11震災後に申請し、受かった舞踊家ジョスリーヌ・モンプティさんが来日し、ダンスの研究に打ち込んでいます。彼女は1980年代よりたびたび来日しており、舞踏家/土方巽、大野一雄、田中泯氏等と交流してきた親日家です。彼女の演技は関西フランコフォニーの日にも見ることができます。日程は次の通りです。

2012年3月20日（祝・火） 会場：兵庫県立美術館/ミュージアムホール 078-262-0901（代表） 開演13時～無料 舞踏公演：ジョスリーヌ・モンプティ（カナダ・ケベック州） 講演会：エティエンヌ・パリリエ（作家/スイス）他 主催：関西フランコフォニーフェスティバル2012イン神戸実行委員会 \*当日の情報ではレセプションには兵庫県知事も出席の予定。

2月には同じ見本市「国際舞台芸術ミーティング (TPAM) in 横浜」で開かれました。その時の報告はブログにあります。 <http://ajeq.blog26.fc2.com/blog-entry-69.html> （安田敬）

## 「なんとなくロマン・ジャポネ」ー ケベック文学最近のトレンド？

ラフェリエールの*Je suis un écrivain*

*japonais* (2006)を伝統的自己フィクションへの挑戦と見るのはおそらく一部のインテリだけであって、ケベックの一般読者にとっては最近の流行を象徴する小説に過ぎない。若い英国作家デヴィッド・ミッチェルの日本を舞台にした「歴史小説」*The thousand autumns of Jacob de Zoet* (2010)の仏語訳が一夜にしてケベック人読者の胃袋に収まったように、日本語の固有名詞の響きや日本文化の符牒は、近年ケベック文学市場に生まれた集团的欲望に応えるオブジェとなっている。20世紀を通して欧州のブルジョワ的感性の一部となった「ジャポニスム」と本質的に異なるものではあるまい。しかし、ケベック・ジャポニスムの特徴は特に文学創作の分野において現れているということだ。初めて「小説家にとってのロマン・ジャポネの欲求」を語ったのは、2011年に*Les Cheveux mouillés*を発表したパトリック・ニコルだが、れっきとした日本人作家であるアキ・シマザキもケベック・ジャポニスムに難なく溶け込んでいる。新刊*Tsukushi*は今春刊行されたばかりだ。この3月、そこにもう一人新しい作家が加わった。フランソワ・ジルベール。31歳。「ムッシュー・サトー」という主人公が架空のアジアで巻き込まれる心理ドラマ、*Coma*を書いた。原稿を受け取ったLeméac社の編集者は、すぐさま「ロマン・ジャポネ」の一つだと識別したらしい。確かにすでに一つのジャンルである。「それっぽい」、「なんとなく」にとどまっているとしても。「なんとなくロマン・ジャポネ」これは21世紀ケベック文学の確実な文学潮流なのか、それとも単にメディアが作り出した現象なのか、ジャーナリストたちには答えが出せない。ジルベール評は、3月3日付の*Le Devoir*書評欄に載ったカトリーヌ・ラロンドによる”François Gilbert, une drôle de bête”に詳しいので参照されたい。(加納由起子)

## 山出裕子会員、キム・チュイに出会う

### ～国際女性デーにモントリオールで～

1970年代には、多くのベトナム人が、「ボートピープル」として、国外へ脱出した。ケベックの人々が彼らの脱出の理由とその経緯の過酷さをどの程度認識しているかは定かではないが、現在のモントリオールにはベトナム料理のレストランが軒を連ね、ベトナム系の名を持つ薬剤師のいるドラッグストアがあちらこちらに見られる。そんな中、2009年にベトナム系のKim Thúy (キム・チュイ)は、最初の作品*Ru* (邦題『小川』)を発表するや否や、ケベックはおろか、カナダ文壇の頂点に登りつめた。出版以来、様々な雑誌やメディアで彼女の姿を見るようになった。彼女は進んで、ボートピープル、マレーシア難民、ケベック移民、ケベックの弁護士、母、作家、といった自分自身の経験について、フランス語で語っている。

3月8日、国際女性デーの日、モントリオール、プラトー地区の女性センターで、彼女の講演会が開催された。私がおの場に赴いた時すでにチケットは完売だったが、チュイの「日本語翻訳家」として特別に参加を許された。約100人ほどの女性観衆の前に立つ小柄なベトナム女性は、北米式の「空気の使い方」で、つまり堂々とした態度に大きな身振りを交えて話していた。アジア系女性作家というよりも、ケベック人作家の講演を聞いているようであった。

講演は、彼女がケベックで学んだフランス語への思い入れから始まり、作品に書かれている通りの来歴が続いた。ボートピープルとしてベトナムを脱出したこと、幸運にもマレーシアの難民キャンプに辿り着いたこと、その後、難民としてケベックに受け入れられたことなどが、ケベックの発音のフランス語で、ケベック人のような身振りで話すアジア系作家によって、2時間にわたって語られた。

作品を翻訳している間は、表現や作風に注目していたためか、他のケベック文学の作品との違いが多くみられたが、実際彼女の口頭での話し方はケベック人そのものであった。しかし、それはケベックのアジア系作家として、新しい特徴であるのではないだろうか。こうした様々な点で「新たな」特徴を持つケベック文学を日本に紹介したいと思っていたところ、彩流社から『小川』を邦訳出版する機会を頂けた。今年6月に刊行される。是非手に取っていただければ幸いである。(山出裕子)



## ニュースレターでは、会員からの特別寄稿文を募集しています

年3回発行されるAJEQニュースレターでは、随時会員の皆様からの寄稿文を募集しています。皆様がお持ちの貴重なケベックに関する最新情報を、他の会員の方にもお届けしましょう。今季号では、安田会員が舞台芸術分野の国際交流の舞台裏について報告してくださいました。また、モンリオールの山出会員が、いち早くケベック移民新進作家キム・チュイについての記事をお送りくださいました。不肖加納も小さなコラムを書きました。文化、社会、政治の分野を問わず、日本のケベック研究者にとって興味深い話題がありましたら、是非皆様も記事にして、ニュースレター担当の方へお送りくださいませ。(加納)



### 日本ケベック学会 (AJEQ) とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は、以下のホームページとブログをご覧ください。

HP: <http://www.ajeqsite.org/index.html>

ブログ: <http://www.ajeqsite.org/index.html>

## 編集後記

2011年冬～2012年初頭にかけて、毎月のようにAJEQ会員が開催した、あるいは参加した、ケベック研究関連のイベントがありました。この特異な恒常性もさることながら、ケベック研究の第一の特徴はやはり、その多様性と国際性であると実感しました。さて、もうすぐ春です。AJEQ会員の全員にとって、2012年度前半が、新しい学術研究・文化活動を開く季節となりますように。

(加納)

### 日本ケベック学会 (2012年2月～)

#### ・ 主要役員

小畑精和 (会長)

立花英裕 (副会長)

小倉和子 (副会長)

池内光久 (監事)

曾田修司 (監事)

C. Y. シャロン (顧問)

#### ・ 広報HP担当

加納由起子

小松祐子

安田 敬

宮尾尊弘

### AJEQニュースレター

年3回発行

発行人・小畑精和

編集人・加納由起子

日本ケベック学会